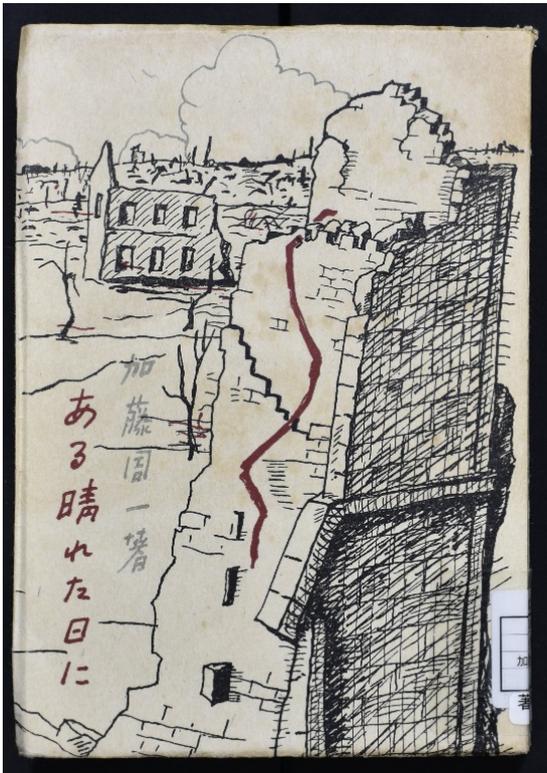


#### (4) 同僚医師との論争



ある日のこと、医局内で同僚医師との論争になった。それは日本軍が守備する島に米軍が上陸したという報道をきっかけとしておこった。報道は「断固敵を粉碎する」といい、加藤は「どうせまた、米軍が占領するのだろう」とつぶやいた。ところが、同僚医師が「どうせまた、とは何ですか」と論争が始まった。「必勝の信念」と「客観的な状況判断」との論争だった。この論争について、加藤は2度書いている。1度は先輩医師との

論争として（小説『ある晴れた日に』）、もう1度は後輩医師との論争として（自伝的小説『羊の歌』）。いつのことなのか、どこの島のことなのか。『ある晴れた日に』には沖縄と書かれ——それならば1945(昭和20)年6月のことだろう——、『羊の歌』には、島の名も日付も明らかにされていない。（前頁写真：『ある晴れた日に』初版本、月曜書房。装幀は六隅許六こと渡辺一夫）

どちらか一方が真実で、どちらか一方が虚構だろうか。あるいは両方とも虚構だろうか。おそらく似たような論争はあったのだろう。知識人——合理的な分析と判断ができる人たち——であっても、自分の専門外以外では、そのような合理的な分析と判断を放棄してしまう人たちがいることを、加藤は身をもって知ったのである。この経験は、日本の知

識人が科学的な方法をもっていないのではなく、時と場合によってはそれを放棄することができるという特徴として捉えることになる。そして「戦争と知識人」という加藤にとって重要な論考に結実していく。この論考は『日本文学史序説』への助走と位置づけられる。